

直言

三木首相が、脱官僚主義の一派としてなのか、ブレインの一人、平沢和重氏を駐米大使に起用しようとしたとき、朴念仁

で知られる東郷外務事務次官は、靴下をいじりながら「その

話なら、自分の首を切ってからし

てくたさいませんか」と諷(いさ)

めたという。この

エピソードは、すでに外国の雑誌に

も報ぜられていたが、東郷次官には拒否の反応を示すと云軌下をいじる鮮があるそうだから、そのエピソードはかなり真実に近いものであろう。いずれにせよ、このエピソードに因するかぎり、後世の外交史家は、そこ

に三木首相の着想の妙をではなく、東郷次官の勇氣と人物を見出すことになるのではなからうか。

その三木首相は、あす日米首脳会議のために訪米する。今回

の日米首脳会議は、懸案なき首

首相訪米に望む

に關して明白な問題提起をおこなっている。したがって、わが国としては、アメリカ側の問題提起に応え得る意思と責任感の表明をして具体的な行動の裏付けが必要になるであろう。

この点は、はたして大丈夫で

中嶋嶺雄

脳会議。たといわれているが、

インドシナ後のアジア情勢を考えたとき、今回の首脳会議はき

わめて重要な意味をもつ会議だといえよう。アメリカ側はす

で六月中旬の日米協会におけるキッシンジャー演説で日米関係

あつうか。三木首相は、訪米前

に、宇都宮徳庵氏を、特使として金日成・北朝鮮主席と会議

させたと思われることなど、その準備を独自に起めているよう

であるが、日米間にとって当面もっとも重要な朝鮮半島政策で

は、他方で宮沢外相訪韓も終わったばかりであり、肝心の問題で政策の一元化さえできていない印象を受ける。今日の時代には、恐ろしく外交も多元外交も大いに結構だが、この場合、根本においてきちんとした外交政策の一元化がなされていこそ効果を発揮できるものであり、さもないならば危殆をわたりないこととなる。

訪米する首相に望みたいことは、いたすらに書生論者がいのは、「外交哲学」を語ったり、発想の妙を誇ったりすることではなく、責任ある日本外交の立場から正攻法でアメリカ側に提起してもらいたいことである。

(東京外大助教授)